



## 只見短歌会

八月詠草

大塚栄一 指導

関谷登美子

漸くに日ざし傾き肩越しに初秋の風吹き入りてくる

古川 英子

極まれる暑さに耐へて書きをればみんみん蟬の声に疲るる

馬場 八智

猛暑日の続きて乾く裏庭に秋海棠は花咲かせたり

新国由紀子

研ぐ暇もなく切れわるき包丁に思はず右の指を傷つく

小倉キミ子

雷鳴と大粒の雨に煙る野の鳥は鳴きやみ身を潜むらし

渡部ゆき子

従弟妹らの新盆迎ふると割りし松焚きつつ高き灯籠見上ぐ

目黒 富子

時経ちて色の褪せゆくふぢばかまの向き変へやれば趣の出づ

渡部ヨリ子

お茶を飲む時間も惜しく動きみて見なれし眺めにふと目をとめる

新国 洋子

暫くはリフォームのためこの部屋より出れぬと娘は食事を運ぶ

(出詠順)

あかあかと村じゅう灯る盂蘭盆会  
盆路を刈りいくたびか振り返る

リウコ

## 只見俳句会

九月例会

目黒十一 指導

関谷登美子

盆終わり時計の針は日常に  
夏の海一直線に切るボート

日焼子の宿題残るノートかな

花壳り女庭の庭園誉めて行き

宝拾う老若男女運動会

道行くや山百合の香のいすこより

墓詣帰りの道は無言にて

吉児

敦子

恒夫

味代子

秋の峰寄りそゝ家は靄の中

彼方より秋風匂う散歩道

敦子

吉児

恆夫

味代子

目の限り野山の錦朝日光

球飛ぶや日毎色づく秋の芝

リウコ

隠し彫りのうさぎ波間に秋あかね

神木の木肌ひときわ涼新た

都

ギラギラと炎暑を刻む血圧計

日焼子の宿題残るノートかな

眼前にひろがる田の面雲の峰

凌霄の花咲く家の忌中札

遠いほど思い出される蓮の花

墓石を噛む空蟬の素顔かな

邦男

順子

礼

あかあかと村じゅう灯る盂蘭盆会  
盆路を刈りいくたびか振り返る

リウコ

吉児

恆夫

味代子

都